

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区北白川追分町 京都大学数理解析研究所図書室

(掲載宛付)

TEL 075-753-7223

- | | |
|---|------------------------------|
| 目 | 1. 目録係、5年目を迎えて (井上雅人) |
| | 2. 或る研究室の現状と夢 (沢田美智子) |
| 次 | 3. 研究集会案内「いま、図書館に何が求められているか」 |

目録係、5年目を迎えて

立命館大学図書館：井上 雅人

昨年秋より体調を崩し、長期療養に陥ってしまいました。今年から職場に復帰し、徐々に体を慣らしていますが、ひさしぶりに大図研の定期誌などを読んでみると、改めていろいろ考えさせられます。回顧的ではありますが、その一部分を述べてみたいと思います。

私は図書館の洋書目録係に配属になって5年目を迎えようとしていますが、この5年間でふりかえってみて、まず思うことは、その変化の激しさです。私が図書館にきた頃の目録業務はタイプライターでカードの原稿を作り、それを印刷にまわし、できあがってきたカードをボックスに組み入れるというのが主な内容でしたが、当時は学術情報システムや、図書館の電算化がさかんに議論され、「従来の目録業務が大きく変化することは避けられない」という一般的な雰囲気がありました。そして短期間で「RUNNERS」が稼働し、90年より目録端末による業務へと移行しました。当時、カードの組み入れがなくなったこととアクセスポイントの多様化による利用者サービスの向上を素朴に歓迎したものです。そして、最初の1年はオンライン目録によるOPACの形成という未知の業務にとまどいを覚えながらも、学情システムへの高い登録件数を維持しつつ、目録係の力量向上をめざして、学情センター主催の目録講習会への参加、立命館での地域講習会の開催をはじめとする系統的な研修計画も実施されました。同時に端末入力の一部委託と遡及事業も開始され、業務の内容も複雑に錯綜することになりました。とにかく、あわただしい1年が過ぎ、2年目には図書館業務全体のパッケージ化をめざして、システム開発がなされ、自動登録機能や雑誌の集中処理のためのSWEETS導入等、多くの改編がなされました。さらに92年には選書機能

やオンライン自動目録システムも加えられる。

このようにふりかえてみると、システムとは生き物であり、常に見直し、改編が要求されるとはいえ、業務を実際にこなしていくことはたやすいことではない、とつくづく思う。特に、データベースの登録件数の増加（学内、NCともに）により、当初予測できなかった多くの新たな問題（例えば重複書誌）が発生し、そのための業務が煩雑になっていること、言い替えれば、増加する一方のデータベースを維持していくことの難しさを痛感しています。また、整理の迅速化もNCにない図書については、なかなかはかどっていない。「求められる資料をいち早く、確実に提供する」という目標の実現にはまだまだ多くの解決しなければならない問題をかかえていると思う。

立命館大学では、理工学部の草津移転と新学部設置を間近にひかえています。図書館でも特別の体制を組んで資料整備を開始します。また、『バリ講和会議』の諸文書を集めたコレクションを光ファイリングシステムを利用してデータベース化するという新たな試みにも着手する。

このようにあわただしい毎日は当分、続きそうですが、日々の忙しさの中で、「利用者である学生や研究者を見失ってはいないか」と、ふと自問する時があります。利用者とはほとんど接することなく、目録係を担当してきた4年の間に、業務内容、体制ばかりでなく大学の教育・研究も大きく変化し、何よりも研究者、学生が様変わりした。そういった激変を経て、5年目を迎える今、「利用者本位に徹した図書館づくりとは具体的にどういうことなのか」をもう一度考えなおしてみる必要を痛感しています。

或る研究室の現状と夢

沢田美智子

国・公・私立大学の文科系研究室（図書室）を考えると、その規模（総合大学・単科大学・女子大学・短期大学など）によって多少の違いはあるにせよ、おおかたは、同じようなことではないかと思う。ただし、文科系といっても人文科学と社会科学ではその専門分野が異なるように研究室（図書室）のあり方・運営が違うのは当然のことであろう。

ここでは、私の職場である文学部の現状を紹介し、こうありたいという希望を少し述べてみたいと思う。

文学部は3学科10専攻を包含し、学部生約5,000名、大学院生の前期・後期合わせて約240名、教員101名、職員は実習助手1名を含めて9名で運営されている。私が配置されている学科は6専攻53名の教員と実習助手1名、それに3名の職員で構成されている。

研究室業務は3名の職員が担当している。が、6つの専攻が同時期に設置されたわけではないため、常に何事によらず6通りのやり方で業務処理することが要求され、現在までその大部分が継承されてきた。たとえば、図書予算の扱い方（使用方法）を見ると、予算のすべてをその専攻の共通予算として系統的に、そして現在・将来を見越して必要な図書資料の収集がされているところもあれば、大幅な個人枠のなかで個々の責任で収書されている専攻や、予算のほとんどが雑誌購入に充当されているところなど実にさまざまである。したがって専攻間での調整はほとんどなく資料が重複することもしばしばである。

図書資料の収集が以上のような事情のため、その配架も同様で、整理済の図書は“新着図書”として一定期間を新着図書棚に展示し、その後書庫へ納庫する場合と個人枠で購入したものはすべて個人の研究室へ貸し出す2通りに大きく分かれている。

また、貸出・閲覧については、まず現在約18,000枚の貸出カードをチェックして図書の所在を確認し、個人の研究室に貸出中であれば一時返却請求をしてのち、返却されてはじめて希望者に資料提供されるしくみである。このため、図書は書庫にあるものと思っている大部分の学生たちは不満そうな様子をみせる。

以上、研究室（図書室）の現状をかいつまんで記したが、様々な問題点の奥に、専攻の事情もさることながら書庫が3ヶ所の鍵を開けないと入れないことや、書庫スペースが構成人数に比べ少ないことなど建物が研究室の機能を考えた設計なのかどうかまで問題が波及してしまう。

学術情報センターが発足して10年がすぎ、情報の共有化・相互利用が叫ばれて久しい。個々の大学図書館も、より開かれた大学図書館をめざしてその名称を学術情報センターへと衣替えするところも出ている。専門書を数多く持つ研究室も従来のままで良いとは言えないだろう。そのことから現在分散している資料室・書庫をまとめ、研究者へは勿論のこと、資料を利用するすべての人達へ必要な資料が必要なきにすぐ利用できるという当然のサービスを高める努力をすすめたいと思う。

（同志社大学文学部研究室）

【竹本註】

同志社大学の研究室では研究室事務と図書業務は区別されず一緒に処理されている。研究室事務職員は研究室にあるあらゆる業務、庶務会計・教務的業務から図書業務まで、即ち、レポートの受け取り、ひっきりなしにかかってくる電話や来客の応対から図書の発注・受入・貸出などまで雑多な業務の処理に追いまくられている。教員の弁当の注文・支払いまで行なっているところもある。実験実習を持つ学部・専攻ではそれらの機器の発注・受取・支

私等も処理しており大変である。図書業務はこうした仕事の合間に行なっているといつてよい。

しかるに外部からは図書館以上に研究室業務の大変さが理解評価されていない。研究室職員に図書業務の経験があるものは少なく、近年になってたまたま少し配置された程度である。人手不足、経験不足の現状では教員の不満も大きく、特に若手教員に図書業務についての不満が強い。こうした状況のもとで研究室職員の悩みは深い。

国民のライフサイクルから図書館の役割を考える集い

いま、図書館に何が求められているか

図書館問題研究会、学校図書館問題研究会、大学図書館問題研究会共催

日時 1992年 5月10日（日）10時半～17時

場所 日本大学経済学部本館2階会議室（JR水道橋下車3分）

会場費 500円（集会後懇親会4000円）

連絡先 図書館問題研究会 TEL 03-3222-5030

〒101 千代田区三崎町2-15-12 高沢ビル

- レポート
1. 住民の知る自由を保障する予約サービスの前進
 2. まち、むらにもっと図書館を
 3. 学校教育の現状と学校図書館の貸し出し
 4. 生徒の読書要求と予約サービスの役割
 5. 大学図書館の学生利用と地域への公開
 6. ネットワーク時代の大学図書館 いま、どんな変化が起っているか

我が国図書館史上初めての全国的な草の根合同研究集会！

「大学図書館は知識の棺桶」を編集したアエラの記者も招待！

文化とライフサイクルについて一緒に考えてみよう！